

日本でのアニマル・セラピーを考える

12 99 2072 津田 真知子

立木 茂雄 ゼミ

日本でのアニマル・セラピーを考える

12 99 2072 津田 真知子

目次

1	アニマル・セラピー	
1.1	アニマル・セラピーとは	2 頁
1.2	アニマル・セラピーの分類	3 頁
1.3	高齢者へのアニマル・セラピー	4 頁
1.4	子どもたちへのアニマル・セラピー	4 頁
1.5	プリズン・ペット・プログラム	5 頁
2	アニマル・セラピーの現場レポート	
2.1	日本レスキュー協会	5 頁
2.2	セラピードッグ訓練所の様子	6 頁
2.3	アニマル・セラピーの様子	6 頁
2.4	アニマル・セラピーの効果	7 頁
2.5	アニマル・セラピーの見解	8 頁
3	アニマル・セラピーが発展しない要因	
3.1	アニマル・セラピーが発展しない仮設	8 頁
3.2	インタビューの実施	10 頁
3.3	インタビューの見解	
3.3.1	施設Hにおけるインタビューの見解	10 頁
3.3.2	施設Aにおけるインタビューの見解	14 頁
3.3.3	施設Lにおけるインタビューの見解	16 頁
3.3.4	施設Nにおけるインタビューの見解	19 頁
3.4	考察	
3.4.1	仮設の論証	22 頁
3.4.2	施設ごとの相違点	22 頁
3.4.3	アニマル・セラピーの肯定要因と否定要因	23 頁
4	結論	
4.1	アニマル・セラピーに対する認知	25 頁
4.2	ヒューマン・アニマル・ボンド	25 頁

はじめに

わたしが時々実家に帰ると、愛犬のエリーがちぎれんばかりに尻尾を振って出迎えてくれる。エリーはわたしが10歳の時に飼い出した雌の雑種である。エリーとの付き合いはもう13年以上になる。エリーがわたしの言うことだけを聞かなくて腹を立てたり、散歩に連れていくのを面倒くさいと思ったりすることもあるが、エリーはそれ以上の喜びをわたしに与えてくれる。わたしにとってエリーはかけがえのない存在なのである。もしも何か嫌なことがあった時でも、エリーに愚痴ると黙って聞いてくれる。エリーを撫でているうちに、だんだん気分が落ち着いてくる。そういう時には、わたしはエリーに癒されているのを自覚する。

わたしはこのようにペットであるエリーに癒されていて、犬は人を癒す不思議な力を持っている、と漠然と思っていた。ある時、医療・福祉の現場で犬たちが治療に参加するアニマル・セラピーというものがあるという話を聞きおおいに興味を持った。そこで卒業論文ではアニマル・セラピーについて、具体的にどのようなことが行われているのか、どのような効果があるのか、また、日本であまりアニマル・セラピーが広まっている様子がないのは何故なのかを調べてまとめることにした。

1 アニマル・セラピー

1.1 アニマル・セラピーとは

アニマル・セラピーとは、動物とのかかわりが人間の健康の質を向上させることである。正確にはアニマル・アシステッド・セラピーといい日本語に翻訳すると「動物介在療法」である。人は何故、動物に癒されるのだろうか。それは、動物は手ごろな大きさであり、撫でると体の温かさを感じることが出来るという触角の喜びなどが理由として挙げられる。中でも犬は、人間の言葉をいくらかは理解し、意思を通じ合わせることが出来る存在である。アニマル・セラピーは社会福祉やリハビリテーションの分野で求められる。高齢者や身体障害者、自閉症の子供たちの社会復帰に貢献している。

さらに、アニマル・セラピーは広義の意味で、うわべは健康そうに見える一般の人々もその対象にしている。それは、ペットとして動物を飼うことで、精神的に癒される場合もアニマル・セラピーと呼べるからだ。人はペットのすやすやと眠る姿を見ると平和を感じ心が安らぐ。また、孤立した生活を送っている人々や、親子関係や夫婦関係など人間関係にひずみが生じている人々はペットに癒されていることが多い。ばらばらであった家族がペ

ットを飼い始めたことで 1 つにまとまったというのはよく聞く話である。災害などの突発的な出来事によるショックも、ペットが身近にいることで回復のスピードが早まるという。

このようにアニマル・セラピーは病んでいる人々だけを対象としているのではないところが一般の医療とは決定的に異なる。

1.2 アニマル・セラピーの分類

1980 年代初頭、アメリカのデルタ協会はアニマル・セラピーを 2 つに区分した。デルタ協会とは、ワシントン州に本部を置き、動物と人間に関するいろいろなデータの収集・発信基地となっているところである。区分された 2 つとは、AAA（動物介在活動 Animal Assisted Activity）と AAT（動物介在療法 Animal Assisted Therapy）である（林 1999）。

Animal Assisted Activity

治療上のゴールを定めず動物と人々とのふれあいを主な目的とする。活動する人たちは詳細な記録を採る必要はない。活動はボランティアの自発性に任されていて、必要によってその活動の期間は長かったり短かったりする。AAA では、動物がセラピーの受け手とボランティア、その他の人々との間の仲介者の役割を果たすという働きが大きい。例えばボランティアの人が初めて犬を連れて老人ホームを訪問した時、ボランティアは高齢者の方々に何を話したらいいのか一瞬ためらうかもしれないが、犬はさっさとおじいさんに近づいていく。そうして三者の関係が作りあげられるのだ。また、ニューヨーク州立大学のロックウッドは、同じ人間が同じ構図でポーズをとっている 2 枚の写真があり、片方の 1 枚にはどこかに動物がいた場合、動物の入っている人の方が「友好的」に見えるという研究をした。アニマル・セラピーの受け手にとっても、ボランティアの人々がやって来たとき、少なくとも動物と一緒にいないときよりも、その人たちを友好的にとらえ距離的にも近づくことを許す。このちょっとしたことが AAA のもつ大きな効果なのである。

Animal Assisted Therapy

医療従事者とボランティアなどが協力し、ゴールを設定して観察記録をとる治療行為である。治療上のある部分で動物が参加することが不可欠である。例えば「身体的」には動けるようになること、「精神的」にはグループ内での相互関係を形成させたり、不安や孤独感を減らすこと、「教育的」には語彙を増やしたり記憶力を促進させたり大きさや色などの概念の知識を増やすこと、「動機付け」としてグループ活動に参加することや、他人やスタ

ツフとの相互関係が増加することなどが挙げられる。

医療行為としてのAATをしっかりと定着させる一方で、医療とまではいえなくても、多くの人々に満足してもらえらるAAAを育てていくことが望ましい。

1.3 高齢者へのアニマル・セラピー

日本では珍しく、施設飼育型のアニマル・セラピーを行っているのが、横浜市旭区にある特別養護老人ホームのさくら苑である。特別養護老人ホームというのは、65歳以上で重度の障害をもち、自力で自立した生活ができず、介護する人が身近にいない、という3条件を満たした人々のための施設である。さくら苑では1986年から動物が身近にいる生活をしていて、そこに暮らす犬を撫でたい近所の子供たちが自然に集まってくる。苑内にはおもちゃも用意され、高齢者はそのおもちゃで子供たちと遊ぶことも出来る。

さくら苑での成果は目覚ましく、動物の世話をしたいという欲求が、当初は4割いた寝たきりの入居者を皆無にした。飼育型アニマル・セラピーは、高齢者の日常生活に対する積極的な姿勢を引き出す。訪問型アニマル・セラピーと比べて飼うという労力は必要になるが、それが生活のリズムをつくることにつながっている（横山 1996）。

1.4 子供たちへのアニマル・セラピー

アニマル・セラピーは子どもたちの社会復帰にも貢献している。アメリカのニューヨーク州ブルースターにある児童養護教育施設、グリーン・チムニーズはそれを実践している。そこには情緒障害や自閉症などを患い、中には性的虐待などの経験をもつ子ども100人くらいが生活している。グリーン・チムニーズは、自然に囲まれた環境を生かし、傷ついた野生動物の手当てや世話を子ども達にゆだねている。自分の心や体に傷をもっている子供たちは、動物が癒されていく姿を目の当たりにして、自分自身の傷も治したいという強い思いが芽生えてくる。動物の回復していく姿と自分の姿を重ね、社会復帰への道をたどり始めるのである。子どもたちの多くは、2年間ほどで施設から巣立つことができるという。

また、動物を飼うことは子どもたちの生命観や人間観を育むことにつながっている。子ども自身が動物と直に接して世話をすることで、自分以外の生き物を理解し思いやりの心が芽生える。生命の尊厳は、モノからでは学び取れないものである。さらに、成長していく過程で動物と接すれば、自分は異なる生き物に対する警戒心が薄れ、その存在を受け入れやすくなる。そうすることで見慣れないものに対する差別意識がなくなってくる。子ど

もが高齢者になっても犬と暮らすことは自立した生活を送る励みになるため、子どもの時から動物との付き合い方を学んでおくことが大切である（林 1999）。

1.5 プリズン・ペット・プログラム

カナダでは刑務所内で受刑者に犬や猫を飼育させるプリズン・ペット・プログラムが進められている。動物愛護団体に代わって、受刑者が捨て猫などの世話をし、動物との触れ合いが受刑者の癒しや更生につながっている。里親が見つかると、動物には受刑者の手紙が添えられることで、受刑者が地域とつながりをもつという意味もある。プリズン・ペット・プログラムは、捨て猫などの世話をする人を求めている動物愛護団体と、受刑者の更生プログラムの多様化を目指すカナダ矯正局とが始めたものである。

日本でプリズン・ペット・プログラムを導入する可能性はまだ低い。その理由としては動物プログラムを行うための動物愛護団体やボランティアの存在が未熟であることや、刑務所が個室の欧米とは違い、日本は雑居房であるために、飼育や運動させるスペースが足りず、ペットが嫌いな人も関わらなければならない、などという理由が挙げられる。しかし動物プログラムへの社会的意識が高まれば、プリズン・ペット・プログラムのような活動も日本で導入されることがあるかもしれない（『神戸新聞』2002.10.30 夕刊）。

2 アニマル・セラピーの現場レポート

2.1 日本レスキュー協会

このたび、卒業論文作成にあたり日本レスキュー協会の協力を得て、アニマル・セラピーの現場を見学することが出来た。日本レスキュー協会は、1995年9月1日に発足した非営利組織（NPO）法人である。日本レスキュー協会は、犬とともに社会に貢献するという理念をもって、災害時に人命を救助するレスキュー犬や、人の心とからだを癒す働きをするセラピー・ドッグの派遣・育成を行っている。また、これらの働きを通して犬のすぐれた能力を多くの人に知ってもらうことにより、犬の社会的認知を高め、動物愛護や保護にも力を注いでいる。

セラピー・ドッグとは、触れ合いや交流を通じて、病気やケガ、または心に傷をもった人たちの不安を減らし、心とからだを癒す働きをする高度な訓練を受けた犬たちである。日本レスキュー協会の目指すアニマル・セラピーは、単に心のケアを目的とした触れ合い活動に留まらない介護ケアプラン・医療プログラムとしての導入である。そのため、精神科

医や大学教授研究チーム，訪問施設の医療従事者とともにセラピードッグが対象者に及ぼす効果についての検証を様々な角度から行っている。

2.2 セラピードッグ訓練所の様子

まずは大阪府池田市にあるセラピードッグ訓練所である，日本レスキュー協会の第2トレーニングセンターを訪ねた。

白い建物の一階には20個ほどのケージがあり，その1つ1つに犬が入っている。セラピードッグだけではなく，レスキュードッグや盲導犬もいた。犬たちのいる大きな部屋の奥にはシャンプー台がある。



図1 訓練所の様子

セラピードッグにとって，病気をもっていないことは不可欠なことなので，犬たちにシャンプーする時に重点的な健康チェックが行われる。1つの部屋にラブラドルやシェパード，ゴールデンレトリバーなどの大型犬がたくさんいるが，臭いもなくとても清潔なケージである。ラブラドルは人好きな犬種なのでセラピードッグに向いているという話であった。

セラピー・ドッグとは，「おすわり」などの基本的なしつけから強い関係をつくっていく。ケージの部屋の隣には屋内トレーニング場があった。セラピードッグは屋内の訓練がメインになるそうだ。訓練所の見学の後，その日アニマル・セラピーが行われる施設へと向かった。

2.3 アニマル・セラピーの様子

日本レスキュー協会が実施しているのは施設訪問型のAATに該当するものである。レクリエーションとしての施設訪問も多数行っているが，今回見学したのは本格的な医療プログラムに沿って行われるアニマル・セラピーである。参加者はセラピー・ドッグである黒いラブラドル犬の「ルーク」と，ドッグ・トレーナーなどレスキュー協会のスタッフ3名だ。「ルーク」は5才で，2才の頃からセラピードッグとして活躍している。訪問先の，

施設Yへの訪問は週に1回のペースで4ヶ月ほど行っている。

セラピーは施設Yの4階にある広いロビーで行われた。3人のお年寄りを対象にして、2回(合計6人)のセラピーが行われた。アニマル・セラピーが始まると医師のかたや施設Yのスタッフのかた、お年よりの家族なども集まってきて10人ほどの人たちが見守っていた。1回のセラピーにかかる所要時間は30分くらいである。3人のお年よりの状況により2回のセラピーに若干の違いはあったが、大まかな内容は同じで次のようなものである。

アニマル・セラピーのメニュー

1. ルークは机の上に座り、ドッグ・トレーナーがお年寄りに挨拶をする
2. ルークの名札をつくって首に通す
3. バナナなど、ルークの好きな食べ物を3つの箱の中に入れて机の上に並べる
4. ルークがくわえて持ってきた箱から食べ物を取り出しルークに食べさせる
5. 3回(1人1回ずつ)繰り返す
6. ボトルから水をくんでルークにあげる



図2 ルークの写真

セラピーが終わり、お年寄りがエレベーターの中に入るとルークがお別れの挨拶をする。このセラピーでは、ルークに名前を書いたり、箱を出したりしまったりという作業が医療プログラムに含まれているようだった。つまり普段は手先を動かさないお年寄りも、目の前に自分の動作を待っているルークがいたら、自然と楽しみながら手先を動かすのである。2回のセラピーが終了すると、安らぎ園のレクリエーションルームへと向かった。レクリエーションルームには50人ほどのお年寄りが集まっていて、それぞれテレビを見たり世間話をしたりしていた。15分ほどルークはお年寄りの中を周り、たくさんの人々がルークを撫でたり、ルークに話しかけたりしていた。そして全てのセラピーは終了した。

2.4 アニマル・セラピーの効果

施設Yの作業療法士であるKさんによると、アニマル・セラピーの効果は次のような3点が挙げられる。まず1つ目として、うつ的な人が普段の生活や他のレクリエーションではあまり観察されない自発的発言が見られ、喜びや楽しみといった感情表現も観察された。2つ目として、他者に対してプライドが高く、コミュニケーションに攻撃的・被害的・防御的傾向が強い人でも笑顔や優しい声かけが見られた。3つ目として、ほぼまったく短期記憶は保持されないと評価されていた対象者のなかにも、犬とその名前を聞くと笑顔で答えることができた人がいた。

このような効果は、犬というコミュニケーション対象は対人コミュニケーションで発生するいわゆる「構え」がないことと、犬自体がもつ愛玩対象の存在が原因となっていることが考える。このようにAATは、重度の痴呆性高齢者などに対して、有効な手段となる可能性を示している。

2.5 アニマル・セラピーの見解

この度、わたしがアニマル・セラピーを見学した際に注目していたのは、セラピーを受けている高齢者の様子である。楽しげに動き積極的にルークに話しかけ、ルークの世話をしようと動きまわる姿を見ると、普段は痴呆の症状があるのだろうか、と驚いてしまうような高齢者もいた。

このように痴呆性高齢者にとって有効な手段であるアニマル・セラピーであるが、日本では認識が低い。それに対して、欧米では1792年に、施設において動物が治療的意図で導入されたという記録があり、200年以上前からアニマル・セラピーが始まっていた(横山1996)。次の章では、日本では何故、アニマル・セラピーが発達していないのかを考え、検証を行いたい。

3 アニマル・セラピーが発展しない要因

3.1 アニマル・セラピーが発展しない仮説

アニマル・セラピーが日本でなかなか根付かない要因となっているのは何であろうか。この問題を検証するにあたり、まずは日本人と動物との関わり方の面から考えてみた。すると日本では、セラピードッグや盲導犬のような、動物プログラムに参加する犬に求められる友好的な性格の犬とのつきあいの歴史が短いことが分かった(富澤1997)。

日本人と犬とのつきあいを歴史的に見てみると、そのことがよく分かる(表1)。

表1 日本人と犬の歴史的なつきあい方

縄文時代	人間の狩猟のパートナーとして深い絆で結ばれていた
	人間と犬だけが丁寧に埋葬されている
弥生時代	稲作が中心になり狩りのパートナーであった犬は縄文時代よりも粗末に扱われる
古墳時代	土器に描かれた犬は現在の日本犬と特徴が同じである
平安～戦国時代	野犬の集団になり人間を襲って食べたり人に捕らえられ食たりしていた
江戸時代～昭和初期	特定の飼い主を持たない町犬が存在していた
第二次世界大戦後	番犬として神経質な犬が重宝されていた
昭和後期～現代	住宅密集地でも飼える友好的で大人しい犬が好まれている

特に注目すべき点は、江戸時代以降である。江戸の町にたむろしていた、いわゆる町犬は特定の飼い主を持たなかった。見知らぬ外来者が来ると吠えて町民に知らせ、その見返りとして餌をもらっていた。江戸時代、このように犬と人との関係はつかず離れずであった。明治以降でも町犬の飼い方は変わらず、犬には自由が与えられ、ある程度自立して生活していたために人が干渉する場面は少なかった。つまり、しつけが行われることで「人社会」に入る必要はなかった。

第二次世界大戦後に狂犬病予防法が成立すると、飼い犬の登録や予防注射の接種とともに、法律で係留が義務付けられた。当時は泥棒が横行していたので、警戒心が強く、人に噛みついたりうるさく吠えて家人に知らせたりする神経質な犬がもてはやされ、おとなしくて友好的な犬は日本では役立たずで「パカ犬」という烙印を押されていた。そして最近になってようやく、住宅密集地域でも飼える、無駄吠えせずに社会性の高いしつけをされた犬が歓迎されるようになったのである。

動物プログラムに参加する犬には、友好的な性格であることに加え、厳しいしつけが必要である。犬が飼い主のいうことにきちんと従う様子を見て、欧米人なら「見事に訓練してたいしたものだ」と飼い主の努力をたたえるかもしれないが、日本人は「なにもそこまで犬をしつけなくても」と考えるかもしれない。

ヨーロッパでは中型犬以上は訓練する事が常識になっているし、飼い主と一緒に訓練をうける施設もたくさんある。しかし日本では、訓練所へ通うのは、よほどの悪癖があつて

困っている人や、訓練大会や審査会に興味がある人など、なにかしら訓練が必要な事情を持っている人がほとんどである。

このことからわたしは、日本人が、動物プログラムに参加するような厳しいしつけをされた犬に対して抵抗感があり、犬を人間の生活に利用するという感覚を日本人が持ち合わせていないことがアニマル・セラピーの発展に結びつかないのではないかと、という仮説を立てた。以下、老人施設へ行ったインタビューによってこの仮説の検証を行うことにした。

3.2 インタビューの実施

仮説の検証にあたり、4つの福祉施設へ行き、各施設で勤める4人の方からお話を伺うことが出来た。わたしの訪問した4つの施設とは、アニマル・セラピーを積極的に行っている施設H、アニマル・セラピーを途中で中断した施設A、AAAの方のみを受け入れた経験のある施設L、アニマル・セラピーの経験が全くない施設Nである。

それぞれにアニマル・セラピーに対する姿勢が違う4つの施設でインタビューを行い、そこで聞いた意見をKJ法によって分析することで、アニマル・セラピーに対する関わり方によってどのような意見の相違点があるのか、比較・検討を行う。

3.3 インタビューの見解

3.3.1 施設Hにおけるインタビューの見解

以下はアニマル・セラピーを積極的に行っている介護老人保険施設Hの看護師長であるNさんに対するインタビューの内容である。

1 アニマル・セラピーを始めたきっかけとしてHからの積極的な姿勢があった

Nさんはもともと犬が好きでリーダーの方とも交流があった。ある日、リーダーの方が施設Hへ犬を連れて遊びに行くという話になったので施設Hでは犬を迎える準備をして待っていた。しかしリーダーの方から、きちんとしたしつけを行っていない犬を連れて施設へ行くのは無理だという返事があった。そのため、Nさんは自らネットなどを利用してアニマル・セラピーについて調べ、レスキュー協会の存在を知った。理事長は新しいことをどんどん取り入れてやってみようという方針であり、早速レスキュー協会にアニマル・セラピーの派遣をお願いすることになった。つまり、アニマル・セラピーに対して施設H側から積極的にコンタクトをとった結果、アニマル・セラピーが始まった。

2 レスキュー協会の人と個人的なつながりをもったこともあり大きな信頼関係がある

Nさんの飼い犬も人なつっこくセラピードッグに向いているのではないかと思います、レスキュー協会に訓練を依頼した．ところが人見知りをするからセラピードッグに向いていないという返事であり驚いた．自分の目から見た犬とプロの目から見た犬の違いを知り、Nさんは、セラピードッグは本当に選ばれた適性のある犬だけがあるのだと実感した．そのこともあってNさんはレスキュー協会の人たちは単なる犬好きではなく、本当に犬のことを知っていて大切に考えている人たちだと断言できる．Nさんがいない時にアニマル・セラピーがあっても、安心して任せられるというほどである．

3 日本でのアニマル・セラピーは実績が無く効果が見えにくい

アメリカではアニマル・セラピーの実証もしているが日本では実績もなかなかなく、アニマル・セラピーの効果は見えにくいものである．そのために同業者の人にも責任をもってアニマル・セラピーを勧めることはまだ出来ない．

4 早くアニマル・セラピーの検証をとって学会などで発表したい

Nさんはアニマル・セラピーの効果を信じていて、お金はかかっても積極的に効果を検証したいと話してくれた．

アニマル・セラピーは精神的・情緒的な効果を生み出すことが多く、その効果を科学的に証明することは難しい．どんなにアニマル・セラピーが精神的に効果のあるものだとしても、個人によって捉えかたの異なる「気持ち」の部分を数値化し、科学的に解析することは困難であるからだ．それがアニマル・セラピーの効果がなかなか出にくい原因になっている(林 1999)．

5 アニマル・セラピーは供給が少ないのに加えセラピストを育てる教育機関もない

施設Hで行っているアニマル・セラピーの頻度は1ヶ月に1回である．Nさんはそれでは効果が分かりにくいのではないかと考え、レスキュー協会に毎日訪問してもらおう思ったが無理であった．それはアニマル・セラピーを求める福祉施設は多く、アニマル・セラピーの供給が少なすぎて需要が殺到しているからであった．さらに、セラピストを育てるレスキュー協会のような教育機関は日本には稀であるためセラピストが育たず、自発的にアニマル・セラピーを行うこともできない．

しかし最近、獣医師の間でアニマル・セラピーを行っていきこうという動きがある．このように供給が増えれば派遣を頻繁に行う余裕ができて効果も見えやすくなるし、アニマル・セラピーにかかる費用も安くなり、発展につながるのではないかとNさんは思っている．

6 アニマル・セラピーは他のセラピーと違い高齢者の反応が予測できない

Nさんはセラピーという心のケアに対する認識は最近高まってきていると感じていて、施設Hではアロマ・セラピーや演劇セラピーなど様々なセラピーに取り組んでいる。しかし、そのようなセラピーは高齢者の反応は予め予測しやすい。

それに対して、アニマル・セラピーでは犬が嫌いだと言って違う所へ行っていた高齢者でも犬が来ると喜んで寄ってくることもあるという。このように高齢者が普段とは違う顔を見せるのはアニマル・セラピーだけである。

7 家族の人にもアニマル・セラピーの反応はよく導入に対しての抵抗は全くなかった

入居者の家族の方たちもアニマル・セラピーを見に来たいというくらい反応がよく、たくさん的高齢者も犬が来るのを楽しみにしている。施設Hではアニマル・セラピーの導入に対しての抵抗は全くなかった。

8 犬はいるだけでその場の雰囲気を変えてわたしたちを癒してくれる存在である

犬はそこにいるだけで雰囲気を変えてくれる。迷い犬が施設Hに来た時も、施設内がとても穏やかな雰囲気になり、その場にいた職員を始め高齢者もみんな癒されていた。

9 補助犬に対して日本人の認識不足があるのは、福祉自体の遅れが影響している

Nさんは、盲導犬は早死にするなどという話を聞くと、ストレスがかかっているかわいそうだという気もするが、人の役に立って働く補助犬に対してとても感謝の気持ちを感じている。その様な補助犬に対して日本人の認識が低いのは、福祉自体が遅れていることの現れではないかとNさんは考えている。

補助犬への理解の低さは、今年の5月に起こった事件を見ても分かる。女性が盲導犬を連れて高速バスを利用しようと乗車券購入を申し出たのに対して、販売係員が「犬はトランクルームに乗せている」と説明をし、事実上、乗車拒否をしたというものである。当然、盲導犬に関しては道路交通法で乗車が認められていた。

盲導犬だけではなく、介助犬なども含む補助犬の、病院や交通機関への受け入れを認めたのが今年の10月に身体障害者補助犬法である。スーパーなど大勢の人が利用する民間施設については来年の10月からの施行が義務付けられている。これまで盲導犬に関しては規定されていたが、介助犬、聴導犬に関する法律はなく、ペットと同じ扱いであった。ただ、受け入れ表明だけでは十分ではなく、受け入れを拒否した施設への罰則がないために補助犬の同伴を拒否できるケースについて問い合わせがきているなどの問題も残している（『日本経済新聞』2002.9.9夕刊）。

欧米では、補助犬を連れた人は、レストランでも商店でも、乗り物の中でもごく当たり前

に振舞い、周りの人も自然に補助犬を受け入れていた。それは、欧米では学校教育の中に、補助犬の役割や一般の人々がとるべき態度などについて学ぶ事が組み込まれているからである（富澤 1997）。

補助犬を連れた人の話では、補助犬と行動を共にすることで心が安らぎ、補助犬は家族同然の存在であるという。また、補助犬を連れて交差点などで立ち止まっていると見ず知らずの人から話しかけられるようになったという。犬を仲立ちにしたそのような触れ合いが、身障者の気持ちを理解してもらう機会にもなる。（『日本経済新聞』2002.7.3 朝刊）

補助犬に関する法律が出来たことで、補助犬を連れた障害者に対する福祉などへの意識面も含めてわたしたちの認識が高まっていくことが期待される。

10 犬の世話をを行うことで強い絆ができるが高齢者が犬の死と向き合えるか心配である

セラピードッグには自分自身が世話をするわけではないので、自分のペットほどの思い入れはない。Nさんは、犬に世話をやしつけをすることは大変だがそれが犬に対する思いと結びつくと考えている。しかし飼育型アニマル・セラピーを行って施設内で犬を飼った場合、その存在に癒されるほど、失った時の悲しみは大きい。例えば熱帯魚ならば、死んでしまった時は同じ種類の新しい個体と取り替えれば高齢者は気づかないかもしれないが、犬ではそうはいかない。施設の職員でさえ立ち直るのには時間を要するのに、死に対して敏感になっている高齢者が犬の死と向き合うのはとても厳しいものである。

犬などの動物の死に関して大きなショックを受ける事をペットロスという。ペットロスは動物に癒されともに暮らし、その死に遭遇すれば誰もが経験することである。食欲不振や不眠などを引き起こす事もあるが、これはペットを失うことに対して起きる正常な反応であって、普通は数ヶ月で回復していく。ところがいつまでも立ち直れずに、臨床心理士や精神科医の治療を受けなければならない場合もある。このような重度のペットロスは日本で増えてきている。それは生活がペット中心になるほどに溺愛することで、ペットとの別れを克服できなくなってしまう人が増えているからである。

11 ボランティアには質の悪いものもあり内容や方針に納得しないと受け入れられない

Nさんは、全てのボランティアが安心できるものではないのに加え、AAAはその内容がよく分からないことに対して不安を感じるという。

中には高齢者の手をつかんで連れてきた犬に無理やり触らせたり、犬の気持ちを無視して押さえつけたりする未熟なボランティアもいるかもしれない。高齢者と犬の両者に故意にコンタクトをとらせようとするのは犬と受け手双方にとって逆効果となる（林 1999）。

12 日本は欧米に比べ福祉が遅れていて痴呆に対する理解や教育も行き届いていない

Nさんはアニマル・セラピーの対象者である痴呆性高齢者に対しての認識不足が多くあると思っている。一般の人だけではなく、医療や介護に携わるスタッフなどの間でもきちんとした教育がされておらず、痴呆の行動に対して押さえつけたりしてしまう面がある。例えば欧米では痴呆性高齢者が何か行動を起こすのはその立場や環境に問題があると考えたのに対して、日本では「問題行動」と呼び、これは介護者側の視点から高齢者を見ていることを示す言葉である。

Nさんは欧米と日本の福祉を比較し、日本の福祉の遅れを痛感している。欧米への視察へも積極的に参加し、施設内部などのハード面に関しても日本は遅れていると気づかされることが多いという。

3.3.2 施設Aにおけるインタビューの見解

以下はアニマル・セラピーを数ヶ月で中断した介護老人保険施設Aの事務長であるHさんに対するインタビューの内容である。

13 院長が犬好きなこともあり本格的なアニマル・セラピーをする予定だった

施設Aの院長は犬好きで、アニマル・セラピーに対しても理解があり、自分の施設でも影響力があるのではないかとということでアニマル・セラピーを始めた。最初はきちんとしたデータを取りながら、本格的なアニマル・セラピーを行う予定だった。

14 施設は職員の数が限られセラピーの準備や効果を検証するのが物理的に難しい

老健施設は職員の人数が少なく、人員配置が難しい。Hさんはアニマル・セラピーを導入する際、アニマル・セラピーの対応に追われながら高齢者の反応まで確認できるのか、またセラピードッグが来たときの受け入れ態勢がきちんと出来るのかという不安があった。また、アニマル・セラピーの効果を検証するには、数人の高齢者に大量のデータが必要であった。さらに、派遣の後にも関わることが多く、そこに対応することが物理的に困難であった。アニマル・セラピーをお願いしたときは職員の数がとても少ない時期でもあり、アニマル・セラピーの派遣は数ヶ月で打ち切ることになった。セラピーを行おうにも、セラピーの効果について疑問がある以前に、セラピーをするための準備に人手が足りないのが施設Aの現状である。

15 施設に犬が運んできてくれる自然な雰囲気求めてアニマル・セラピーを行っていた

もともと施設Aでアニマル・セラピーを始めたのは施設内に何かしらの変化を求めたか

ったからで、アニマル・セラピーの科学的な効果を期待して始めたわけではなかった。

Hさんは施設内で暮らしている高齢者には、外や自然とのつながりをもってほしい、セラピー犬が運んでくるやわらかい雰囲気を受けてほしいと思った。いつもとは違う風を施設内に吹き込むという意味では、アニマル・セラピーは十分に効果があった。

16 痴呆性高齢者が犬好きかどうかは分からないが表情やリアクションが普段とは異なる

高齢者が犬好きかどうかは痴呆のために確認がとれず分からないが、犬を嫌がる人については本人の意志に任せた。アニマル・セラピーの瞬間的な効果として、高齢者の表情が普段と全く変わり、通常は見られないようなリアクションを取ることがあった。

17 アニマル・セラピーに対して入居者の家族の反応はよい

アニマル・セラピーの実施を家族はとても喜んでいたし、施設で犬を飼えたらいいと耳にすることは多い。いつの日かアニマル・セラピーが施設に定着することがあればいいとHさんは考えている。

18 犬の死に高齢者が向き合えるか心配である

9の意見と同様で、犬の死と高齢者が向き合えるか心配であるし、世話をする職員の人手が足りない。

19 アニマル・セラピーは持続性のある効果がなかなか見えず経済的にも負担がかかる

アニマル・セラピーを数ヶ月行ったが、月に1回のアニマル・セラピーでは持続性のある効果はなかなか見えにくかった。また、アニマル・セラピーの実施にはお金がかかり経済的に苦しいという短所がある。

20 セラピー犬以外の犬と痴呆性高齢者が関わるのが不安でA A Aは受け入れにくい

Hさんは、痴呆でどのような行動に出るか分からない高齢者とセラピー犬ではない犬が関わることを不安に思っている。例えば突然高齢者が犬を叩いたりする可能性もあり、そのような時にも絶対に向かっていかないという犬でないと安心はできない。よってA A Aは受け入れにくい。

21 補助犬への厳しい教育は飼い主との絆や愛情につながる

Hさんは、トレーナーと補助犬は教育し服従するという関係であり、愛情だけで育てられるペットとは異なるものだとして認識している。しかし補助犬と飼い主は忠誠心と深い絆で結ばれているので、補助犬を福祉に利用しているという言い方は出来ない。

Hさんは犬のしつけを子育てと同じようなものだと考えている。犬の世話は大変でも、それを大変だと感じながらしていれば表面的な愛情しか持ち合わせていないのではないかと

と思っている。

22 日本の福祉事情は大変厳しいが今の状況下でどうしたらよいか考えなければならない

Hさんは日本の福祉の厳しい現状を感じている。福祉事情には税金など、さまざまな問題が絡んでいて、今の状況でいったいどのようにすれば安心した老後を迎えられる福祉になるのだろうかと思案している。日本と欧米の福祉は歴史が違って差があるので、欧米へと視察へ行っても日本の福祉への参考にはしにくい。Hさんは、欧米に追いつこうとするよりも、今の状況下でどうしたら一人一人が良かったと思える時間がつくれるのかを考えなければならないと思っている。

23 無責任にペットを捨てる人がたくさんいる

震災後の仮設住宅で、猫を飼う人が多くいた。ところが仮設住宅の撤去に伴い、何十匹もの猫が置き去りにされ野良猫となって暮らしている。

仮設住宅のみならず、毎年夏の終わりに避暑地の別荘で捨てられる犬がいたり、狩猟シーズンが終わると各地の野山で使い捨てにされ放置される猟犬がいたりする。いまの飼い主の中には、犬を単純に所有物とみなし、モノ扱いする傾向が強い人もいる。飼い主の勝手な理由で犬や猫を簡単に放置してしまう（富澤 1997）。

しかし仮設住宅跡地に残された何十匹もの野良猫を、誰に評価をされるわけでもなく世話をしている老婦人がいる。避妊手術から、えさ代まで出費し、1人で黙々と世話をしているのである。このような老婦人には頭の下がる思いである。

3.3.3 施設Lにおけるインタビューの見解

以下はAAAのアニマル・セラピーを受け入れた経験のある有料老人ホームLのケアサービス課長であるIさんに対するインタビューの内容である。

24 ボランティア団体から声がかかってAAAを受け入れたことがある

Iさんは、動物療法という形でアニマル・セラピーのことはだいぶ前から知っていた。ある時ボランティア団体からアニマル・セラピーの声がかかりAAAを受け入れた。

25 アニマル・セラピーにかかる費用に対しそれだけの効果があるのか分からない

AAAにかかるお金や犬の世話代を考えると、費用と効果の関係を天秤にかけてしまう。アニマル・セラピーの効果が実証されたら取り組みたいと思っはいるが、今はまだ積極的に取り組もうとは思えない。

26 アニマル・セラピーを行うには職員の配置や管理体制が必要になる

アニマル・セラピーを行うとなると、犬が嫌いな人はどうすればいいのかなどと気をつかったり、セラピーを行う場所の設定から他の行事との兼ね合いなどの調整をしたりしなければならぬ。そのような動物の受け入れ態勢を整えるのが大変であり、犬を飼育するにしても世話の継続が困難である。

27 アニマル・セラピーは家族も喜ぶし高齢者の表情や情緒面に効果が期待できる

アニマル・セラピーに対して入居者の家族の反応はいい。また、AAAが来たときに高齢者が普段とは違う表情を見せダイナミックな反応があったので、情緒面での効果が期待できた。頻繁にアニマル・セラピーを行うとなるとその受け入れ態勢が大変であるが、時々ならあってもいいとIさんは思っている。

28 補助犬を育てるには厳しいしつけが必要だが最近では全体的に介護能力が低下している

セラピードッグは大人しいだけでは駄目であり、しっかりとしたしつけを行う体制が必要となる。厳しいしつけを行ってもその目的があるために「しつけが大変」と意識することはないのではないかとIさんは思う。しかし最近では、自分の子どもを育てるのが面倒くさいという人もいますので、何かを育てる介護能力が全体的に低下しているのかもしれない。

29 盲導犬への認識が広まることからペットと人間との新しい関係が認知されてくる

Iさんは、補助犬はその役割をもっているのですばらしい存在だと思っている。そして、セラピードッグよりもその役割が目に見えるために具体的で分かりやすい盲導犬から社会に認知されていけばいいと考えている。盲導犬に対する認識が高まれば、犬と人間との新しい関わり方への理解が広まり、セラピードッグなど他の補助犬への理解につながってくると思うからである。

30 ボランティアを継続させるには施設側の支援体制がしっかりしていなければならない

ボランティアを受け入れることに関して主に3つの不安な要素がある。まず1つ目は、ボランティアの人たちに対して継続性を求めるためには施設の受け入れ態勢がしっかりしていなければならないという点である。ボランティアの人たちに対して、いつまで来てくれるのだろうかという不安がある。しかしボランティアの人たちに継続性を求めるのは無理な話であり、ボランティアを支える施設の支援体制がしっかりしてこそ、ボランティアは気持ちよく活動できるし継続性も保障されることになる。2つ目は、ボランティアと施設側が行うサービスで重なる部分が出てきた場合、本来なら施設側で行うはずのサービスを無償のボランティアが提供することで、施設がサービスを怠っていると受け取られる可能性があるという点である。そして3つ目は、ボランティアという第三者が施設に入ること

で入居者のプライバシーが目に入る機会が多くなり、それだけ施設はリスクを負う守秘義務の問題があるという点である。

31 施設Lで取り組んでいる音楽療法は身近で取り組みやすいセラピーである

欧米ではセラピーが資格として認められているのに対し、日本では認められていない。しかし施設Lで行っている音楽療法は、聞いたり自ら演奏したりという様々な楽しみ方があり身近で取り組みやすい。例えば映画療法などを行うと目が悪い人は除外されるが、音楽療法はそのようなことがない。また、施設Lでは心のケアに関して、テクニックやスキルよりも高齢者とのコミュニケーションを大切にしたいと考えている。

32 日本人の飼い主は人とペットとの関係を見直す必要がある

施設Lの周りに猫が捨てられ、Iさんが保健所へと連れて行ったことがある。どこかへ逃がしてあげてもその猫がいい飼い主にめぐり会える保障はないし、またたくさんの野良猫を産んで虐待を受けるかもしれない。そう考えると捨て猫や捨て犬を保健所へ連れていくのは人間として果たせる責任ある行動だとIさんは思っている。ペットを捨てる飼い主も、野良犬にエサをあげたりする行動も、ペットに対する責任が希薄である。自分に合っている犬を選んで、生涯一緒に暮らす欧米の動物とのつきあい方に対して、日本のペットショップには流行犬が並ぶ(富澤 1997)。このことは、日本人が愛玩の対象として犬を選ぶ傾向が強いことを表し、犬を商品化してしまうことで生き物を飼うという責任の希薄化につながっているのではないだろうか。その一方で、ペットを溺愛しすぎてペットから病気が感染してしまう人もいる。ペットから病気の感染があることなど、今は知らない人の方が多いが、そのことが広まってくれば、これからペットとつきあいにくくなってしまう可能性もあるとIさんは危惧している。

33 痴呆性高齢者への理解が低く援助の対象者を支配の対象者と取り違えている人がいる

Iさんは痴呆や障害を持っている人に対して、子どもに話しかけるような口調で話しかける人によく出会う。現在と過去が不思議に混ざり合った世界にいる痴呆性高齢者の方を「子どもがえり」したと勘違いして、その先入観を持ったまま介護をして失敗する人は多い。このような痴呆性高齢者に対する認識不足は、援助の対象者を支配の対象者と取り違えてしまうことにもつながる。

34 福祉の何が良いかは1人1人の価値観によるものである

日本と欧米の福祉にはギャップがあり、欧米へ視察に行ってもそれを日本ですぐに活かせるという話にはならない。しかしIさんは、日本と欧米でどちらかが優れているという

風には思わない。欧米では弱者は保護され、社会に参加すべき存在である。それに対して高齢者は家族の手で介護したい・介護されたいという話を聞くように、日本では弱者は世話をされるべき存在であり、弱者も助けてもらふべきだと考えている。今Iさんがお世話をしている高齢者も保護してもらうことに幸せを感じている人がほとんどであり、欧米のように自立こそが大切なことだとは思われていない。高齢者が福祉に求めるものは変化していくものであるし、高齢者と接していると福祉の何が良いかは一人一人の価値観によるものだと分かる。

3.3.4 施設Nにおけるインタビューの見解

以下はアニマル・セラピーに対する経験が全くない総合福祉施設Nの施設長であるOさんに対するインタビューの内容である。

35 アニマル・セラピーに対する理解度は低いPRがあった方がよい

Oさんはセラピードッグがどのような犬なのかよく知らなかった。アニマル・セラピーを行うことで高齢者が喜んでいたという話は聞くが、単発的なもので終わっているような気がするので、「一度やってみよう」と思えるようなアニマル・セラピーに関するうまいPRがあればいいと思っている。

36 アニマル・セラピーは学術的な根拠がなく本当に効果があるのか分からない

他の施設で出たものと同じ意見である。

37 施設内で動物と関わることは衛生上気をつかい職員への教育も必要になる

Oさんは、犬が運んでくるダニや毛が飛ぶことなど、アニマル・セラピーに対して衛生面での心配を大きくしていた。また、飼育型アニマル・セラピーを行った「さくら苑」の成功の背景には、職員の計画的な働きかけが大きな要因となっているとOさんは思っている。「さくら苑」にはただ犬がいるだけではなく、徹底的に教育をされた職員が役割を担ってこそ成功したものだと考えられる。よってアニマル・セラピーを効果的に行うためには職員への徹底的な教育が必要になるというのがOさんの意見である。

38 孤独感を癒す存在である犬と接することで高齢者は気持ちを落ち着かせ安心できる

Oさんのいた施設に、犬が迷い込んだことがあった。寝たきりの人がその犬を見て大喜びをして、抱き上げて離さず、その人の孤独が伝わってきた。痴呆などの症状がある人は、誰かが傍にいただけで安心する。姿がかわいく、存在するだけで孤独感を癒す力を持ち温かい犬は、高齢者にとって良いコミュニケーションの相手になるとOさんは思っている。

39 病院には介護職員が少なく病院で症状を悪くして施設へと移ってくる高齢者が多い

日本の病院には介護職員が少ない。そのため、病院で病状を悪化させてから施設Nのような施設へと移ってくる高齢者が多い。よって、施設には痴呆の症状などが重い人が多く、そのような人は犬の世話ができない。アニマル・セラピーは、ある程度元気で犬の世話が可能である高齢者の現状維持という目的であれば受け入れやすいとOさんは思っている。

40 家族にはアニマル・セラピーを反対されそうなので慎重に話す必要がある

アニマル・セラピーを施設Nで実施することになったとして、それを入居者の家族に伝えると「効果が分からないセラピーをして高齢者を実験台にするのか」と非難されるのではないかとOさんは思っている。入居者の家族には何を聞くにもタイミングが必要である。

41 日本人は密接した関係をつくるために補助犬につながるような動物への考え方がない

補助犬という考え方は欧米からもたらされたものである。欧米では犬はその個を認められ、犬には犬の役割が与えられる。そのような動物観は、日本には浸透していないために、日本は補助犬に対する認識が浅いとOさんは思っている。

欧米と日本の動物観の違いは次のようなものである。西欧人と動物との歴史について考えると、低温乾燥の気候である西欧では穀物より牧草が育つために、牧草を食べて育つ食用家畜からカロリーを取っていた。また、キリスト教の「人間は動物よりも優位に立つ存在である」という考え方が浸透していて、西欧人は動物を無駄なく利用し管理していた。それに対して、日本人と動物との歴史について考えると、西欧とは違い食用家畜をほとんど飼育していなかった。公に肉類を食べることは少なく、穀物中心の食生活であった。それは仏教の輪廻転生の思想によるものである。輪廻転生の思想とは、全ての命は巡りに巡って、次に自分が生まれ変わるの動物かもしれない、という考え方である。つまり、日本人は動物を「利用する」ことに慣れていない。日本人にとって、動物は人間と同等の位置にあり、支配して利用する対象ではないのだ(林 1999)。補助犬は、ある意味では動物を利用しての福祉活動だといえるものであり、それが補助犬に対する日本人の認識不足に影響をおよぼしているのかもしれない。

さらに、欧米では家族の中でもプライバシーが守られているが、日本では人間関係もペットとの関係も混ざってしまい、密接した関係である。特にペットはいたずらに擬人化されたり、過保護に育てられたりするケースが多い。核家族の多く希薄化した日本の家庭の中で、ペットが家族の一員となり迎えられる。飼い主はペットの目を通して、通常は表現しにくい自分の家族を理想的に描き出すこともある。さらに、ペット用の服やアルバム、仏壇など様々なサービスが次々と始められている。これらは、動物の生を人間の人生に重

ね合わせた末に出てくるサービスであることに注意をしなければならない。肉親の欠員はペットによって埋められ、新たにペットによって「家族」が生成されている。とはいうものの、災害時にペットが置き去りにされるような例は多く、ペットは家族の一員と言われながらも、その生命は飼い主に握られたままの「拘束された家族の一員」である。

最近では、ペット介護が話題となっている。ペットの寿命は年々延びていて、2001年の犬の平均死亡年齢は14.17歳で20年前の4.7倍にもなっている。このようなペットの高齢化に伴い、ペットの介護を余儀なくされるケースが増えてきた。年老いたペットを看取る人間のほうも高齢の場合が多く、なかには「老老介護」に疲れて体調を崩す人もいる。それに対して、欧米では安楽死の選択をする人が多いという。このことは、欧米人はペットをパートナーとして認め大事にしながらも、犬は動物であることを認識していることを表しているのではないだろうか。

42 個人主義の欧米は老人ホームも個室が多く時間の融通が効く

欧米は個人主義である。欧米の福祉施設には個室が多く、時間の融通が効くために1対1で犬と関わりやすく、アニマル・セラピーを行いやすい環境にあるといえる。

43 集団主義の日本は福祉も時間に追われるがコミュニケーションはとりやすい

日本は集団主義である。そのため、食事や入浴も合同で行われ、時間に追われている様子があった。しかし集団主義の中では、隣の人に「手伝おうか」など声をかけたり、かけられたりしやすいという良さもある。最近ではその良さをいかしたグループケアの取り組みが始まっている。

44 暇もないので見て帰るだけの視察に行きたいとは思わない

日本人は欧米へ視察に行くのをけむたがられているという。Oさんは、ゆったりとした視察なら行きたいが暇もなく、見て帰るだけになるのなら特に視察へ行く必要はないと考えている。

45 痴呆の人の気持ちが分からないのでどんなセラピーを喜んでもらえるのが分からない

Oさんは、痴呆の人に対してどのようなセラピーが有効であるのか、喜んでもらえるのが分からない点が多いという。

46 高齢者は内と外とを区別することでそれを意識しながら過ごすことができる

在宅老人で、家の中は乱れていても外に出るとしっかりしている人は多い。また、化粧品療法は化粧をすることでプライベートとパブリックとの気持ちの区切りをつけることが出来て効果があるという。このように、高齢者は他者との関わりを持ち、他者を意識するこ

とでしっかりするのではないだろうか。それは犬との生活という点でも言えるかもしれない、とOさんは思っている。

3.4 考察

3.4.1 仮設の論証

わたしがインタビューを行う前に立てた仮説は、日本人は犬を厳しくしつけるということに嫌悪感をもっていて、動物を利用するということに慣れていないというものだった。しかしインタビューを行うと、「ストレスがかかりかわいそうだとは思う」という意見はあったものの、どこの施設も「補助犬が人の役に立つためには厳しいしつけが当然求められる」といった意見であった。ペットの飼い主に対して責任感を疑う答えが多く、動物に対して人間本位につきあっていると感じられた。さらに、日本では動物実験が認められていることをふまえると、日本人は、動物を利用することに慣れていないとはいえない。

それではアニマル・セラピーが発展しない要因は一体何であろうか。以下は4つの施設に対するインタビューの相違点をまとめたものである。

3.4.2 施設ごとの相違点

各施設で一致した意見

- ・犬はその存在だけで人を癒し安心させてくれる
- ・日本の福祉の現状は厳しい
- ・AAAに関してはどの施設も否定的な意見を持っている
- ・補助犬に対しては厳しいしつけが必要である

施設ごとに異なった意見

- ・AATを行った施設の院長はいずれも犬好きであった
- ・施設Hはセラピーの効果は見えにくいので自分たちが検証したいという姿勢であったのに対し、他の施設は効果が見えないので積極的に取り組めないという答えであった
- ・何らかの形でアニマル・セラピーを経験した施設は入居者の家族の反応が良かったと話したのに対し、施設Nはアニマル・セラピーを行う際、入居者の家族から苦情が言われると反応を気にしている
- ・アニマル・セラピーを積極的に行おうとしている施設Hは日本の福祉の遅れを痛感し欧米への視察にもどんどん参加しているのに対し、他の施設は視察についてあまり意味が

ないと感じ欧米に福祉の面で追いつきたいというような意見は持っていない

- ・施設Hはアニマル・セラピーが広まらない原因としてその供給不足を挙げているが、他の施設は職員の対応や人員不足を挙げている
- ・施設Hはアニマル・セラピーの需要が殺到して供給が全く足りていないと話しているのに対し、施設Nはアニマル・セラピーのPRが必要だと話している
- ・AATのアニマル・セラピーを行ったところは犬を嫌がる人について本人の意志に任せただのに対し、行っていないところは犬を嫌がる人はどうすればいいのだろうかと危惧している

犬に癒しの効果があり、痴呆性高齢者や寝たきりの高齢者に喜ばれる存在であることは各施設の方から聞くことができた。また、ほとんどの施設の方が日本の福祉の良さもあるが現状は厳しく、特にアニマル・セラピーの対象者でもある痴呆性高齢者の方に対する認識不足を話していた。また、AAAに関してどの施設も否定的な意見を持っていた。本来ならばアニマル・セラピーはAATよりAAAの方が経済的にも存在的にも受け入れやすいものではないだろうか。AAAという形でアニマル・セラピーの認知度を広げながら徐々に本格的なAATを発展させていくことが、日本にアニマル・セラピーを一番定着させやすい広まり方であると考えられるのに、AAAはアニマル・セラピーを積極的に進めようとしている施設Hにおいても受け入れにくいという話だったので、アニマル・セラピーが定着することの難しさを感じた。

AATのアニマル・セラピーを行うきっかけとしては、犬が好きであるという単純なことから始まっている。また、アニマル・セラピーの経験がない施設Nだけが、アニマル・セラピーの導入に対して入居者の家族の反応を危惧していることは、入居者の家族に考えられる反応がアニマル・セラピーを行う時の考慮点となっていることが推測できる。さらに、施設Hが日本の福祉の遅れを痛感して欧米への視察へ積極的に参加し、欧米の福祉を学ぼうとしているのに対し、施設Nは日本と欧米の福祉は根本的に異なるものだとして認識しているため視察へ参加した事がなく、今後も参加するつもりはないと答えていた。このことから、欧米から伝わったアニマル・セラピーに対して積極的になるということは、欧米の福祉を積極的に取り入れようとする事と関係しているのではないかと思われる。

3.4.3 アニマル・セラピーの肯定要因と否定要因

次に、インタビューを行った各施設の意見を統合してアニマル・セラピーの肯定要因と否定要因とに分け、それぞれの最も大きな要因を導こうと思う。その方法として、各施設で行ったインタビューを大まかにまとめた。そのまとまりをアニマル・セラピーの肯定要因（資料1）と否定要因（資料2）とに分けてそれぞれの要因間の関係を検証した。

アニマル・セラピーの肯定要因神話図が図3である。まず始めに、アニマル・セラピーを受ける施設側、もしくは行う側からのアプローチがある。行う側からのアプローチとしては、レスキュー協会のようなAATを行っている団体は需要が殺到しているという話があったので、ボランティア団体からのアプローチが多いと推測される。受ける側からのアプローチの特徴としては、施設の院長が犬好きであるなど、犬の魅力を知っていることがアニマル・セラピーを受け入れようとするきっかけになっているようである。このようにアニマル・セラピーに接点を持ったとき、セラピストやセラピードッグに対する理解や信頼があるかどうか、アニマル・セラピーを行うか行わないかの最も大きな要因になっていると考えられる。アニマル・セラピーを積極的に行っている施設HのNさんについては、レスキュー協会に対して個人的なつながりをもったこともあり、非常に大きな信頼を寄せているため、Nさんがいない時であってもアニマル・セラピーをレスキュー協会に任せられるという話があった。アニマル・セラピーを行うために、人数の少ない施設の職員をその準備などに割かなければならないという、他の施設のアニマル・セラピー否定要因と決定的に異なるところでもある。

アニマル・セラピーを行うことで、入居者の家族の反応が良い、高齢者の表情やリアクションがいつもと異なる、犬がいることで雰囲気が変わり癒される、などのプラス効果が現れる。補助犬に対する厳しいしつけも、犬との絆が深まり福祉に利用しているだけとはいえないという肯定要因に認められる。このようなアニマル・セラピーの効果が、早くアニマル・セラピーの検証をとって学会などで発表したいという、より積極的な意見を導いている。

次にアニマル・セラピーの否定要因が図4である。欧米から広まったアニマル・セラピーであるが、欧米と日本とでは福祉に対する考え方も、動物に対する考え方も異なることから、福祉に動物を利用するアニマル・セラピーに対する考え方や理解がなかなか日本には浸透していない。セラピストを育てる教育機関もなく、アニマル・セラピーの供給は少ない。さらに、アニマル・セラピーを行うのには費用がかかり、その効果に実績や根拠がない。それらのことが、厳しい現状を迎え、金銭や人手に余裕がない福祉施設側の事情と

結びついてアニマル・セラピーの実施を困難にしている。加えて、セラピーやその対象者である痴呆性高齢者に対する理解や教育が施設の職員自体も足りていない、アニマル・セラピーを気軽に始められて理解をするきっかけにもなるAAAの受け入れは施設側の支援体制が整っていないと困難である、というような否定要因も、アニマル・セラピーに対して十分な準備ができない施設側の事情と結びついている。

以上のことから、アニマル・セラピーの肯定要因はセラピストやセラピードッグに対する理解や信頼があること、反対に否定要因は物理的な余裕のない施設側の厳しい現状である、というのが私の導いた見解である。

4 結論

4.1 アニマル・セラピーに対する認知

アニマル・セラピーを発展させるには、セラピストやセラピードッグに対する理解が必要であることが分かった。日本レスキュー協会は、捨て犬をケアし、セラピードッグに育成しようと「セラピードッグハウス医療センター（仮称）」の開設を予定している。しかしその建設資金の募金が目標額に及ばず苦慮しているという。このようなニュースは、アニマル・セラピーに対して世間一般の人々についても認識が低いことを示している（『日本経済新聞』2002.11.26 夕刊）。アニマル・セラピーについてのわたしたちの認識が上がれば、施設にアニマル・セラピーの導入を促すような世論が生まれてくるかもしれない。

4.2 ヒューマン・アニマル・ボンド

人間と動物との絆のことをヒューマン・アニマル・ボンドという。現在の日本はペットを擬人化し、家族として溺愛するが、補助犬など人間を助け活動する犬に対しての認知度は低い。犬を商品化し、人間の都合に合わせて飼ったり捨てたりしている。今のわたしたちは、動物とうまく共生しているとは言えない状態である。

日本の福祉施設には物理的な余裕が無く、セラピーという精神的なケアまで行うのは難しいという現状がある。けれど人間と動物が関わりあいながら暮らしている以上、アニマル・セラピーのように、上手に動物と共生していくことが必要なのではないだろうか。

40字×30行 24頁 原稿用紙 72枚

資料1 アニマル・セラピー肯定要素

- アニマル・セラピーを受ける側・行う側からのアプローチがある
 - アニマル・セラピーを始めたきっかけとして施設Hからの積極的な姿勢があった
 - 自分も理事長も犬が好きで飼っていた
 - ブリーダーの人が犬を連れてきてくれるという話だったがしつけないので無理だと分かった
 - 理事長は新しいことをどんどん取り入れようという考え方をしている
 - 自分でネットで調べてアニマル・セラピーを派遣しているレスキュー協会を知り連絡をとった
 - ボランティア団体から声がかかってアニマル・セラピーを受け入れたことがある
 - 動物療法という形でアニマル・セラピーはだいぶ前から知っていた
 - 捨て犬を連れてボランティア団体から声がかかった
- セラピストやセラピー
 - 自分自身は犬がこわい
 - 院長が犬好きなこともあり本格的なアニマル・セラピーを行う予定だった
 - 院長がとても犬が好き
 - アニマル・セラピーに対して理解があり自分の施設でも影響力があるのではないかと始めた
 - 最初はきちんとしたデータを取りながら本格的なアニマル・セラピーを行う予定だった
 - レスキュー協会と個人的なつながりをもったこともあり大きな信頼関係がある
 - 自分の犬も人なつこいので見てもらってセラピードッグにしようと思った
 - 自分の犬は人見知りをするのでセラピードッグに向いていないと言われた
 - セラピードッグは本当にセラピードッグに向いている犬だけであると実感した
 - レスキュー協会の人は本当に犬のことを何よりも大切に考えている人たちだ
 - レスキュー協会の人は単なる犬好きではない
 - 自分がない時にアニマル・セラピーがあっても安心して任せられる
 - レスキュー協会の人を信頼している
- 入居者の家族の反応が良い
 - 家族の人にもアニマル・セラピーの反応は良く導入に対しての抵抗は全くなかった
 - 家族の人にもアニマル・セラピーを見に来たいというくらい反応が良かった
 - みんな喜んでいてアニマル・セラピーに対しての抵抗は全くなかった
 - たくさんの高齢者が犬がくるのを楽しみにしている
 - アニマル・セラピーに対して入居者の家族の反応はよい
 - アニマル・セラピーの実施を家族はとても喜んでいて
 - 施設で動物を飼えたらいいと耳にすることは多い
 - アニマル・セラピーが定着することがあればいいと思う
- 高齢者の表情やリアクションがいつもとは異なる
 - 痴呆性高齢者が犬好きかどうかは分からないが表情やリアクションが普段とは異なる
 - アニマル・セラピー中には高齢者が通常は見られないリアクションをとる
 - アニマル・セラピーの瞬間的な効果としては高齢者の表情が普段と全く変わる
 - 高齢者が犬好きかどうかは痴呆のために確認がとれず分からない
 - 犬を嫌がる人については本人の意志に任せた
 - アニマル・セラピーは家族も喜ぶし高齢者の表情や情緒面に効果が期待できる
 - アニマル・セラピーを取り入れたら入居者の家族は喜ぶ
 - セラピードッグが来る事は情緒面での効果がある
 - AAAが来た時、高齢者にダイナミックな反応があった
 - 犬が来るのは時々ならあってもいい
 - アニマル・セラピー中には高齢者がダイナミックな動きをする
 - 普段表情が変わらない高齢者も犬に対しては違う顔をする
 - アニマル・セラピーは他のセラピーと違い高齢者の反応が予測できない
 - セラピーをするにしても無理強いはいしない
 - 犬を嫌だといった人が犬が来ると喜んでくれる
 - 犬が嫌いな人はアニマル・セラピーの間、違う所へ行ってもらおうが犬が来ると寄ってくる人もいる
 - アニマル・セラピーは高齢者が予測しない突然の行動をとったりする
 - アニマル・セラピーでは高齢者の普段見られない姿が見れる
 - 高齢者本人もアニマル・セラピーを行うことで予測していなかった行動をとるのではないだろうか
 - 他のセラピーは高齢者の反応をあらかじめ予測できる
 - 色々なセラピーに積極的に取り組んでいる
 - セラピーという心のケアに対する認識は最近高まっていると思う
 - アロマ・セラピーや演劇セラピーにも取り組んでいる
- 犬がいることで雰囲気が変わり癒される
 - 孤独感を癒す存在である犬と接する事で高齢者は気持ちを落ち着かせ安心できる
 - 犬と接する事で気持ちが落ち着く
 - 犬はいるだけで孤独感を癒す存在である
 - 寝たきりの人のところに迷い犬がきたとき、その人は大喜びでその人の孤独が伝わってきた
 - 迷い犬が寝たきりの人の孤独を癒した
 - 動物を見るとかわいいという刺激がある
 - 手で犬を触れてぬくもりを感じることは大切である
 - ペットもセラピードッグもコミュニケーションの対象となる
 - 痴呆の人は、犬でも人でも何かが傍にいただけで安心する
 - 人形セラピーを行うと普段は落ち着かない高齢者でもじっとしていると聞いた
 - 犬はいるだけでその場の雰囲気を変えて癒される存在である

犬がいるだけで雰囲気全然違う

犬はいないよりいた方がいい

迷い犬が来た時もとても穏やかな雰囲気になってみんなが癒された

セラピードッグもペットの犬も癒されるという点で同じ

施設に犬が運んでくれる自然な雰囲気を求めてアニマル・セラピーを行っていた

施設内に変化を求めてアニマル・セラピーを始めた

アニマル・セラピーの効果を期待して始めたのではない

違う風を施設内に吹き込むという意味ではアニマル・セラピーは十分に効果があった

犬が自然に運んでくるやわらかい雰囲気を高齢者に接してほしい

施設内で暮らしている高齢者に外や自然とのつながりを持ってほしい

犬へのしつけは愛情につながる

補助犬への厳しい教育は飼い主との絆や愛情につながる

補助犬が苦しい訓練を受けているから可哀相だと表面的には言えない

補助犬は飼い主に気持ちを通わせた忠誠心があるから福祉に利用しているとは言えない

セラピードッグは教育されていてトレーナーに服従する点でペットとは違う

ペットにはむやみやたらと愛情を注ぐ

セラピードッグは教育を教わるのでセラピストの一方的な愛情で関わってはいけない

犬のしつけは子育てと同じようなものである

犬の世話を大変だと感じながらしていればそれは表面的・自己満足な愛情である

世話は大変でもそれを大変だということはクローズアップすべきことではない

アニマル・セラピーの効果を早く検証したい

早くアニマル・セラピーの検証をとって学会などで発表したい

自分たちはアニマル・セラピーは効果があると思っているので早く学会などで発表できるくらいにな

アニマル・セラピーにいくらお金がかかってもいいから検証をとりたい

資料2 アニマル・セラピー否定要素

- 日本人と動物との関係は見直さなければならない点が多い
- 補助犬を育てるには厳しいしつけが必要だが最近では全体的に介護能力が低下している
 - セラピードッグは厳しくしつけられていてペットとは違う
 - セラピードッグは大人しいだけでは駄目である
 - セラピードッグにしつけをするような体制が必要
 - 目的をもって犬を飼う以上は面倒くさいなどとは考えない
 - 近頃は自分の子どもを育てるのを面倒くさいという人もいて介護能力が全体的に低下している
 - 日本人は密接した関係をつくるため補助犬につながるような動物への考え方がない
 - 欧米と日本では犬との関わり方が違う
 - 欧米は犬は犬でその個を認められている
 - 欧米では犬は犬の役割がある
 - 今の日本人は犬との付き合い方の面から補助犬を受け入れにくい
 - 今の日本にはアニマル・セラピーに対する考え方がない
 - 動物と人間の関係は風土や文化と関係している
 - 日本人にアニマル・セラピーに対する考え方や経験があれば受け入れやすい
 - 犬が人間の役に立つためには厳しいしつけが必要となる
 - 日本の人間関係はべったりとしている
 - 日本ではペットとの関係がべったりしている
 - 日本では犬も人間も混ざってしまってペットの溺愛などが起きている
 - 欧米では家族の中でもプライベートが守られている
 - 犬の死に高齢者が向き合えるか心配である
 - セラピードッグが死んでしまった時に高齢者が死と向き合えるかどうか分からない
 - 無責任にペットを捨てる人がたくさんいる
 - 震災後の仮設住宅で猫を飼う人が多くいたが仮設住宅の撤去に伴い何十匹もの猫が置き去りにされた
 - 自費で捨て猫の避妊手術やえさの世話をしている老婦人がいる
 - 日本人の飼い主はペットとの関係を見つめ直す必要がある
 - 飼い主のペットに対する責任が希薄である
 - 捨て犬を保健所に連れて行くのは人間として果たせる責任ある行動である
 - 無責任に野良犬にエサを与えるのはよくない
 - ペットは溺愛・虐待の対象となっている
 - 人とペットとの関係を見つめ直す必要がある
 - 動物と日本人がつきあってきた文化や習慣がある
 - ペットを溺愛しすぎて病気が感染する人がいる
 - ペットから病気の感染があるなど今は知らない人が多い
 - これからアトピーの子どもなどが動物と関わりにくくなるのではないか
 - 犬の世話をすることで強い絆ができるが高齢者が犬の死と向き合えるか心配である
 - 犬の世話やしつけをすることは大変
 - セラピードッグには自分が世話をするわけではないのでペットほどの思い入れはない
 - 飼育型アニマル・セラピーは犬が死んでしまった時に自分たちも落ち込むが特に高齢者が立ち直れるか
 - 高齢者は死に対して敏感
 - 熱帯魚なら同じ種類のものを入れ替えればいいが犬はそうでは済まない
 - 福祉の考え方は国や個人によって異なる
 - 福祉の何が良いかは1人1人の価値観によるものである
 - 日本と欧米の福祉にはギャップがある
 - 欧米へ視察へ行ったがそれをすぐ活かせるということはない
 - 日本と欧米の福祉でどちらかが優れているということはない
 - 無理に欧米に合わせることはない
 - 福祉には日本なりの良さもある
 - 欧米では弱者は保護されるべき存在である
 - 欧米では弱者は社会に参加すべき存在である
 - 日本では弱者は世話をされるべき存在である
 - 日本では弱者も助けをもらうべきだと考えている
 - 今世話している高齢者の中には世話・保護をもらうことに幸せを感じている人がほとんどである
 - 高齢者に自立こそが大切なことだとは強制できない
 - 現在の日本の高齢者に自立は求められていない
 - 日本社会ではその中で自分の役割を見つけることが大切
 - 高齢者といくと福祉の何が良いかは一人一人の価値観によるものだと分かる
 - これからの高齢者が福祉に何を求めるかは分からず考え方は変わる
 - 個人主義の欧米は老人ホームも個室が多く時間の融通が効く
 - 欧米は個人主義
 - 欧米の福祉施設には個室が多い
 - 欧米の福祉は時間的に余裕がある
 - 欧米の福祉は個室があり時間の融通が効くから犬とも関わりやすい
 - 集団主義の日本は福祉も時間に追われるがコミュニケーションはとりやすい
 - 日本は集団主義
 - 日本の福祉は集団で食事や風呂などを行う
 - 日本の福祉は時間に追われている
 - 日本の介護は大変な時代が続いていた
 - 日本には声をかけたりかけられたりという集団ならではのコミュニケーションがある

集団主義の中で隣の人に「手伝おうか」など声をかけられるのが日本の福祉の良さである
今まで依存させていた人に対して個人主義のように自立させるのがいいとは思わない
最近はケアの仕方が変わってきている
最近はグループでのケアの取り組みが始まり時間がゆったりとしてきた
大集団になると福祉は難しいので10人くらいが理想である

高齢者は内と外とを区別することでそれを意識しながら過ごすことができる
在宅老人の部屋の中はめっちゃちゃでも外に出るとしっかりとしている
化粧療法はプライベートとパブリックな部分を使い分けるといった気持ちの区切りが出来て効果的らしい
高齢者は他者との関わりの中でしっかりとる
高齢者が動物との生活ということを意識して過ごせばいい
自分個人と他人との世界があるという意識をもつことは高齢者にとっていいことである
自分以外のものつきあっていくルールの下にいることでしっかりとるのではないが

暇もないので見て帰るだけの視察に行きたいとは思わない
日本人は欧米へ視察に行くのをけむたがられている
視察へ行っても見て帰るだけである
ゆっくりとした視察なら行きたいが暇がない

アニマル・セラピーに対する理解や供給が少ない
アニマル・セラピーは供給が少ないのに加えセラピストを育てる教育機関もない
アニマル・セラピーを求める老人ホームは多いと聞く
1ヶ月に1回ではなく毎日来てもらおうと思ったが無理だった
アニマル・セラピーの供給が少なすぎて需要が殺到している
獣医の間でアニマル・セラピーを行っていいという動きがある
アニマル・セラピーをしようというところをもっと増えれば発展するのではないだろうか
セラピストを育てて世の中に送り出す教育機関をもっと必要
セラピストを育てている施設はレスキュー協会しかないのではないだろうか
セラピストが育たないから自発的にアニマル・セラピーをすることはなかなか出来ない
セラピストが国際資格になればいい

アニマル・セラピーに対する理解度は低いPRがあったほうがよい
アニマル・セラピーについて話には聞いたことがある
セラピードッグのことはよく知らない
アニマル・セラピーに関するうまいPRがあれば受け入れやすい
アニマル・セラピーは高齢者が喜んでいたら聞くが単発的なもので終わっている気がする

補助犬に対して日本人の認識不足があるのは福祉の遅れが影響している
補助犬は人の役に立っている
補助犬に対してとても感謝を感じる
盲導犬は早死にするなどと聞くと犬にはストレスがかかっているのだろうとは思う
盲導犬などへの理解が少ないのは福祉が進んでいないという現れではないだろうか
もっと補助犬が増えて日本人の認識もふえればいい

盲導犬への認識が広まることからペットと人間との新しい関係が認知されてくる
補助犬はその役割を持っているのですばらしい
もっと多くの人に補助犬に対する理解が必要である
補助犬がもっと社会に認知されればいい
セラピードッグよりも盲導犬の認識が高まってほしい
盲導犬の方がセラピードッグよりも具体性があるからペットと人間との関わり方を啓蒙で

家族にはアニマル・セラピーを反対されそうなので慎重に話す必要がある
入居者の家族にアニマル・セラピーのことを話すと効果の実験台にするのかと反対されそう
入居者の家族には何を聞くにもタイミングが必要である
家族にはアニマル・セラピーのことはかえって聞かない方がいい

日本人は福祉・痴呆に対する理解や教育が未熟である
病院には介護職員が少なく病院で症状を悪くして施設へと移ってくる高齢者が多い
病院には介護職員が少ない
病院で悪くなってから老人ホームへ移ってくる高齢者が多い
老人ホームには痴呆などの症状が重い人が多い
高齢者は体調が悪くなってから老人ホームへ来るために犬の世話ができない
アニマル・セラピーはある程度元気な高齢者の現状維持を図るものとしてなら取り入れやすい

日本は欧米に比べ福祉が遅れていて痴呆に対する理解や教育も行き届いていない
痴呆性高齢者に対して一般の人の勉強不足を感じる
痴呆に対して医療・介護業界においても勉強不足な人がいて教育が行き届いていないと感ずることがあ
痴呆に対してのスタッフ教育が遅れている
痴呆に対しての理解・意識・教育が足りない
痴呆の行動に対して日本では押さえつける
日本で痴呆の行動を「問題行動」と呼ぶのは介護者側の視点から高齢者を見ているからだ
欧米では痴呆で行動を起こすのはその立場や環境に原因があるはずだと考える
欧米と日本とでは福祉に対する考え方自体違う
日本の国自体、福祉に対する対応が悪い
痴呆の高齢者や障害者に対する施設などのハード面に対して日本は遅れている
日本は外国に比べ福祉が全然遅れている
欧米への視察へは積極的に行っている

痴呆の人の気持ちが分からないのでどんなセラピーを喜んでもらえるのか分からない
痴呆の人の気持ちが分からない
痴呆の人に対して何をすればいいのかわからない

痴呆性高齢者への理解が低く援助の対象者を支配の対象者と取り違えている人がいる
今と昔が混ざった世界にいる痴呆の人を「子供がえり」と勘違いしてその先入観を持ち介護に失敗するこ
援助の対象者を支配の対象者と取り違えてしまうことはよくあることなのかもしれない
痴呆・障害をもっている人に対して子どもに話しかけるような口調で話しかける人によく出会う
日本の福祉事情は大変厳しいが今の状況下でどうしたらよいか考えなければならない
日本の福祉の厳しい現状を感じる
福祉事情には税金など色々な問題が絡んでいる
現状を見ると今の状況でどういう風にすれば安心して老後を迎えられるのだろうかと思う
日本がこれから福祉にどう取り組んでいくのかは捉えがたい部分がある
社会に守られ安心して老後を迎えられるような福祉になればいいと思う
欧米と日本とでは福祉の歴史が違う
欧米へ視察へ行ってもそれを参考にここでどうするとは全然ならない
今の状況下で一人一人が良かったと思える時間をつくりたい
欧米の福祉に関して追いつきたいというより今の状況下でどうしたらいいのかを考えなければならない

アニマル・セラピーを行うには費用がかかり効果に実績・根拠がない
アニマル・セラピーにかかる費用に対しただの効果があるのか分からない
アニマル・セラピーの費用と効果の関係を証明する
アニマル・セラピーの費用と効果を天秤にかける
アニマル・セラピーは効果が実証されていない
効果が分からないと積極的に取り組もうとは思えない
アニマル・セラピーの効果が実証されたら取り組みたい
AACの方はお金がかかる
犬のえさ代や世話代がかかる
高齢者はセラピーの感想などを口に出さない
子どもだったらセラピーの感想を話したり書いたりする

アニマル・セラピーは持続性のある効果がなかなか見えず経済的にも負担がかかる
アニマル・セラピーは持続性のある効果がなかなか見えない
月に1回のアニマル・セラピーでは持続性のある効果には結びつかないのではないかと
アニマル・セラピーで何がどうなったという効果が話せるほどは分からない
アニマル・セラピーの効果が短時間で出るとは思わない
アニマル・セラピーはお金がかかり経済的に苦しい

日本でのアニマル・セラピーは実績が無く効果が見えにくい
アメリカではアニマル・セラピーの実証もしているが日本では実績がない
アニマル・セラピーの効果は見えにくい
アニマル・セラピーの効果はよく分からないので同業者にも責任をもって勧められない

アニマル・セラピーは学術的な根拠がなく本当に効果があるか分からない
アニマル・セラピーは学術的な根拠がない
アニマル・セラピーは本当に効果があるのか分からない
アニマル・セラピーは効果が確立すれば受け入れやすくなる

AAAを受け入れるのには施設側の支援体制が不可欠である
セラピードッグ以外の犬と痴呆性高齢者が関わるのが不安でAAAは受け入れにくい
AAAは受け入れられない
痴呆で行動が予測できない高齢者とセラピードッグでない犬が関わるのが不安
何をされても向かっていけないという犬でないと安心できない
AAAについて1%でも不安があれば受け入れることはできない

ボランティアには質の悪いものもあり内容や方針に納得しないと受け入れられない
AAAはその内容がよく分からないから不安を感じる
AAAはその人たちの方針・内容をよく聞いて納得ができれば受け入れる
中には質の悪いボランティアもいる

ボランティアを継続させるには施設側の支援体制がしっかりしていなければならない
ボランティアの人が代わっても来てくれるのだろうか
ボランティアの人たちに継続性を求めるのは無理な話である
今日始めて明日辞めるといってもボランティアたる所以である
無償のボランティアで施設のサービス提供を怠っていると受け取られるかもしれない
ボランティアという第三者が施設に入ることに入居者のプライバシーが目につく施設はリスク
ボランティアを支える施設の支援体制がしっかりしてボランティアも気持ちよく活動できるし継続性も保証
ボランティアを受け入れる為には窓口となる職員を決めて施設の業務としての位置付けをしなければな

施設の現状を考えると様々な準備を要するアニマル・セラピーは取り組みにくい
施設は職員の数が限られセラピーの準備や効果を検証するのが物理的に難しい
アニマル・セラピーは数人の高齢者にたくさんのデータが必要である
レスキュー協会からの派遣は数ヶ月で打ち切った
派遣の後も関わる事が多くそこに対応する事が物理的に困難
セラピードッグをお願いしたときは職員の数がとても少ない時期だった
アニマル・セラピーの受け入れ態勢に不安があった
アニマル・セラピーの対応に追われて高齢者の様子まで確認できるか不安
老健施設は職員の人数が限られている
老健施設は職員の人員配置が難しい
夜は数人の職員が泊りこむが犬の世話まではなかなか出来ない
セラピーの効果という前にセラピーをする準備に人手が足りない
他のセラピーには特に取り組んでいない

施設内で動物と関わることは衛生上気をつかうし職員への教育も必要になる

犬にダニなどを運ばれたら困る
移動動物園というのを聞いたことがあるが毛が飛んだりするのではないか
犬がきらいな高齢者がいるかもしれない
犬の大きさや性格、おとなしさなど犬を選ぶだけで大変
院内で犬を飼ったら結局院長が世話をすることになる
効果の出ているアニマル・セラピーは職員の計画的な働きかけが多い
職員への徹底的な教育が浸透していなければならない
犬を飼う事になったら職員の態度も大事になる
アニマル・セラピーを行うには職員の配置や管理体制が必要になる
動物が来た時その管理を誰がするのかという問題がある
アニマル・セラピーが来た時の職員の配置が難しい
動物からの感染症はないか
犬が嫌いな人はどうしていればいいのか
アニマル・セラピー以外の行事との兼ね合いを調整する
入居者を集めて犬やボランティアを紹介する
アニマル・セラピーを行う場所の設定
動物の受け入れ態勢を整えるのが大変である
セラピードッグが来ても世話の継続が難しい
高齢者がペットを飼うのは大変である
施設で取り組んでいる音楽療法は身近で取り組みやすいセラピーである
音楽療法に取り組んでいる
音楽療法は身近である
音楽療法は聞いたり演奏したり様々な楽しみがある
映画療法は目が悪い人や耳が悪い人が除外される
欧米ではセラピーが資格として認められている
日本ではセラピーといっても遊びなのかボランティアなのか分からない
心のケアに対する認識はまだ低い施設ではテクニックや知識よりもコミュニケーションスキルを大事に

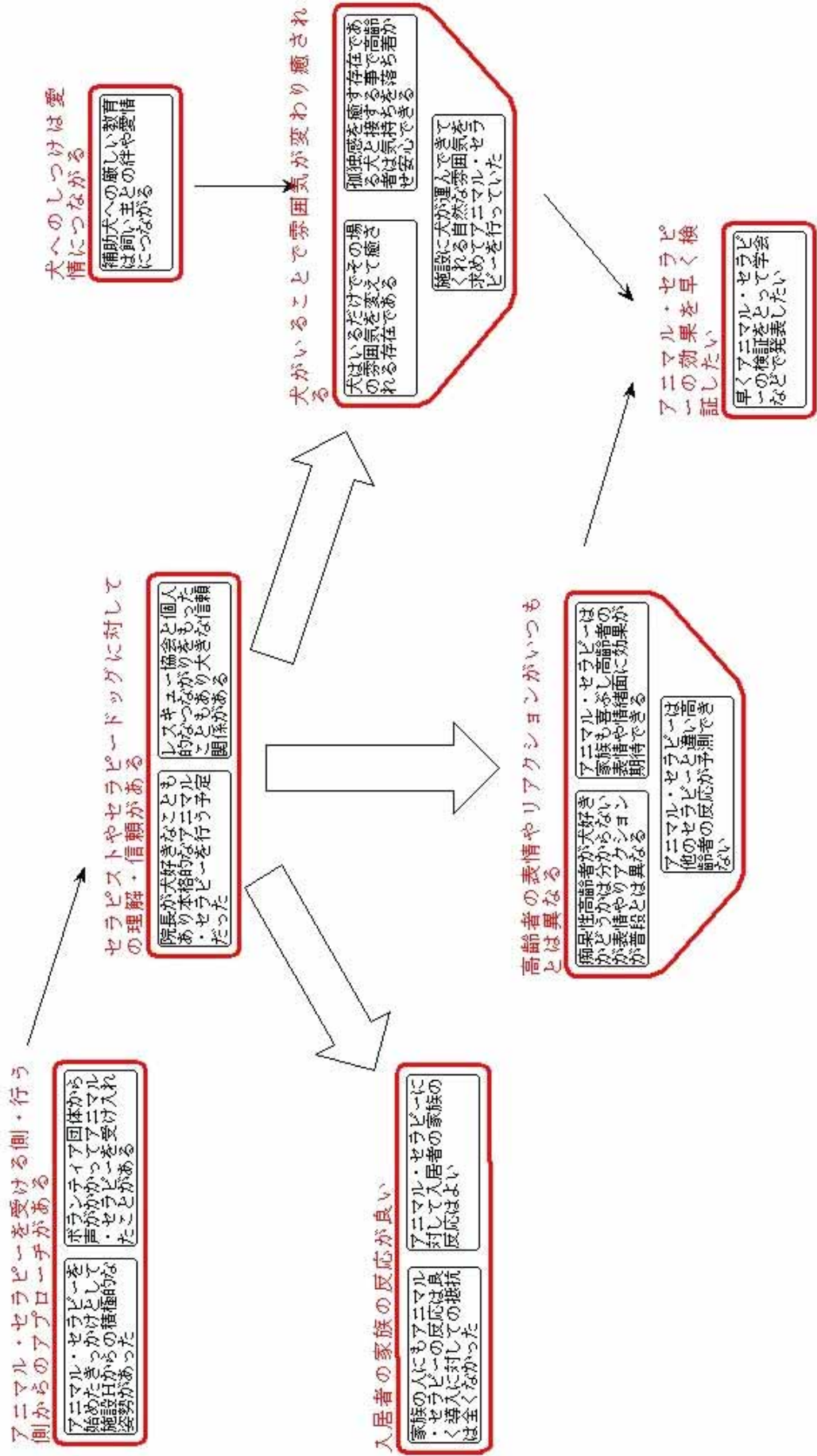


図3 アニマル・セラピー肯定要素神話図

福祉の考え方は国や個人によって異なる

アニマル・セラピーに対する理解や供給が少ない

アニマル・セラピーを行うには費用がかかり効果に実績・根拠がない

アニマル・セラピーは
かかる費用に比べて効果があるのか
分らない
アニマル・セラピーは
実績が無く効果が目見え
にくい

アニマル・セラピーは
持続性のある効果がある
か目見えず経済的にも
負担がかかる
アニマル・セラピーは
学術的な根拠がなく本
当に効果があるのか分
らない

アニマル・セラピーは
供給が少ないうえに
アニマル・セラピーは
補助犬に比べて日本人
の認識不足が影響して
福祉の遅れが影響して
いる

アニマル・セラピーは
補助犬に比べて日本人
の認識不足が影響して
福祉の遅れが影響して
いる

アニマル・セラピーに
対する理解度は低く
よいP.R.があったほうが
よい
盲導犬への認識が広ま
ることからペットと人
間の新しい関係が認
知されてくる
家族にはアニマル・セ
ラピーを反重に話す必要
がある

施設の現状を考えると様々な準備を要するアニマル・セラピーは取り組みにくい

施設は職員の数に限ら
れれば設備や物理
的設備を整えるのが物理
的に難しい
施設内では動物と関わる
ことは衛生上気をつけ
なければならない
施設で取り組んでい
る言葉療法は身近で取
り組むのが難しい
アニマル・セラピーを
行うには職員が必要に
なる

日本人は福祉・痴呆に対する理解や教育が未熟である

病院には介護職員が少
なく施設で症状を悪く
する高齢者が多い
痴呆の人の気持ちや分
かからないのでどうせ
セラピーをやらせよう
と分らない
日本の福祉事情は大変
厳しいが今の状況下で
どうしたらよいか考え
なければならぬ

日本人は欧米に比べ福祉
が遅れていて痴呆に対
する理解や教育も行き
届いていない
痴呆性高齢者への理解
が適切に援助の対象者
と取分けられている人
が少ない

福祉の何が良いかは1
人1人の価値観による
ものである
個人主義の欧米は老人
ホームも個室が多く時
間の融通が効く
集団主義の日本は福祉
も時間に追われるがコ
ミュニケーションはと
りやすい
高齢者は内と外とを区
別することから過ごす
ことができない
暇も無いので帰って帰
るだけの観察に行きたい
とは思わない

日本人と動物との関係は見直さなければならぬ点が多い

補助犬を育てるには硬
しいしつけが必要だが
最近では全体的に介護
力が低下している
日本人は密接した関係
をつくるため補助犬に
の考え方がない
無責任にペットを捨
てる人がたくさんいる
犬の死に高齢者が向
き合えるから心配で
ない
日本人の飼い主はペ
ットとの関係を見つ
め直す必要がある
犬の世話をを行うこと
で強い絆ができてき
るから犬の死に向
き合えるから心配
である

AAAを受け入れるには施設側の支援体制が不可欠である

セラピードッグ以外の
犬と痴呆性高齢者が関
わるのが不安
は受け入れにくい
ボランティア以外の
悪いものもあまり内容
方針に納得しない
ボランティアは原
則的には施設側の支援
体制がしっかりしてい
なければならぬ

図4 アニマル・セラピー否定要素神話図

[文献]

林良博，1999，『検証アニマルセラピー』講談社．

横山章光，1996，『アニマル・セラピーとは何か』日本放送出版協会．

富澤勝，1997，『日本の犬は幸せか』草思社．

四国新聞社，2002年，「乗車拒否？ - 盲導犬はトランクに」

(<http://shikoku-np.co.jp>，2002.5.22)

戸塚ひろみ，1991，「ペットと家族の物語」上野千鶴子『シリーズ変貌する

家族4 家族のフォークロア』岩波書店，251-270．

向井香，2002，「寝たきりのペットを看取る」『朝日新聞Weekly A

ERA』3：26-27．